

平成28年度 第1回木曾生物群集保護林復元部会の概要

開催日及び場所	平成28年10月18日(火) 13:20~15:30 林野庁中部森林管理局 大会議室
出席委員	岡野哲郎(信州大学農学部 教授) 部会長 大住克博(鳥取大学農学部附属 フィールドサイエンスセンター 教授) 正木隆(国立研究開発法人 森林総合研究所 森林植生研究領域 領域長) 横山隆一(公益財団法人 日本自然保護協会 参事) 委員6名中4名出席 五十音別 敬称略
議 題	1 人工林の天然林化について 2 木曾生物群集保護林復元計画について 3 その他
概 要	<p>○ 委員からの主な意見等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・間伐方法は、目標とする林型によって変わってくる。一律の間伐ではなく、目標を定めて考えるべき。 ・間伐は森林を育てるために行うから目標林型は必要。林齢50年生以上は列状間伐を避けた方がよい。 ・「木曾悠久の森」のコアaとコアbでは、間伐の考え方を変えた方がよい。例えば、コアaでは、天然林からの種子で早急に更新を図る。コアbでは、対象面積が大きいことから当面人工林としての施業を行う。 ・間伐により天然更新が促進されるとは限らないことから、高齢の人工林を育てながら次の世代をどうするか考えたい。 ・天然林化のための間伐を計画する施業地の優先順位はどのように定めているのか。コアaではより早く天然林化を図るため優先して間伐を行うべきことと、林齢のみによる機械的な選定でなく復元に向けて必要な施業という観点から対象地決めが必要。 →林分状況を踏まえ、必要な箇所の間伐を行おうと考えている。なお、コアbのヒノキ林では、天然ヒノキの代替材を生産することも意図している。 ・モニタリングの方法は、機械的ではなく、どのような施業を意図して行ったのかわかるようにし、意図したとおりに応答しているかどうかを評価できるものにした方がよい。その場合、調査間隔は5年より3年程度で見ることがよいものもあるのではないかな。 →長期にわたり継続できるモニタリングを検討したい。 ・モニタリングは、林床を対象とするのではなく、上木を対象として行ってみてはどうか。人工林として施業していくなかで復元を図るのであれば、上木も測る必要がある。 ・モニタリングは、長期にわたり継続できる箇所を最小限でもいいから設定し、必要に応じて短期的なものを付け加えた方が現実的だ。更新時に過去の履歴が大事だ。 ・間伐では更新が難しいことから、更新にこだわるモニタリングではなくてもよい。 ・カラマツ林では、広葉樹の天然更新状況をモニタリングする必要がある。地上レーダ計測も有用だ。 ・保安林の指定施業要件に関わる地位級については、現在の樹高に基づいて見直すべきではないか。 ・木曾生物群集保護林復元計画の記載項目はどのように決められているのか。記載内容は具体的である必要がある。 →林野庁の長官通知に定められている。 ・ヒノキ林について200年先の目標林型が示されているが、途中の50年、100年などの目標林型を定めないと具体的な施業方法が定められない。 ・当面は、普通の人工林施業を行えばよい。どのように広葉樹が混交してくるかによって、途中で行うべき施業方法が分かれてくるだろう。 ・人工林は、70~80年生で成熟段階になり、100~120年生で下層に広葉樹が侵入してくるので、その時点で次の目標を定めたらよい。 ・カラマツ林をどのように復元させていくかが重要だ。 ・苗場山のブナ林では更新したブナがササに負けたことがあるので、更新完了調査方法は慎重に検討すべき。 ・更新完了判定は、抜き伐りが終わる前に行う方法も考えられる。 ・抜き伐りを繰り返したら立木がなくなる。ある程度進んだ段階で更新を促す作業を繰り返し、その後に最終の主伐を行えばよい。 ・モニタリングの成果を分析すれば、適正な抜き伐り回数がかかるのではないかな。 ・復元計画書には、自然の力と偶発的な要素の活用を重要視し、植物群落の進む方向を見ながら人為のかけ方の見直しを行う姿勢を書き込んでもらいたい。また、対象は狭い意味の森林・高木のみならず、温帯性針葉樹林を中心として成立する生物群集の保護・復元を図ることが目的であることを明確に記述されたい。

※本会議は、平成28年度第2回木曾悠久の森管理委員会植生管理専門部会を兼ね開催された。